しんらばんしょう
全面教育学研究会通信
2014.　4.1　No.18

《１月例会報告》

我が育心の遍歴

昭和２０年代の
熱い向学心が
伝わってきます

宗教教育から始まる庄司学

庄 司 和 晃

新たなる企画として今回から庄司先生による回顧談がスタートした。

１９２９年生まれの庄司先生において最大の出来事は“戦争に負けた”ということであった。海軍飛行予科練習生であった先生は１６歳で終戦を迎えた。同じ頃、陸軍幼年学校にいた板倉聖宣氏は、「ウソ（戦争の大義）を見抜けなかった」という慚愧の思いから主体性教育を提唱し、仮説実験授業に結実していく。同じ仮説実験授業の研究者であった庄司先生も、７０年の歴史ある海軍の体系が崩れ去るのを見て「諸行無常」を感じたと当時を語る。

その思いは消えることなく２人の教育学者のエネルギーと化していくのである。庄司先生が「生きることのすばらしさ」と語るとき、その言葉の重みは命を賭した実感から発生している。

戦後、山形師範学校に入り１９４８年山形で小学校の教員になるものの曹洞宗の寺に生まれたこともあり、宗教学を極める思いを抱いて上京、成城学園で教える傍ら東洋大学、日本大学で仏教学を学んだ。

さまざまな宗教教育理論を学ぶうちに曼荼羅の意味や密教の奥義に触れながら庚申信仰など仏教の習俗はなぜ伝わっているのか、という疑問を抱いていたという。

意外にもその疑問を解き明かしてくれたのは宗教学者ではなく成城学園の教育にも関わっていた柳田国男であった。当時、柳田の著作で一番読んだのは『先祖の話』であったという。数々の民間信仰の疑問を解いてくれたこの作品は、体系的で哲学的で個性的であったという。

今回庄司先生は『我育心の遍歴』という数㎝もの重厚な自筆原稿をまとめたものを持ってきてくれた。それを読むと、書くことが好きだったと述懐しているとおり、折に触れて研究論文が書かれていることが分かって研究心の熱さに圧倒された。その冒頭には次のような声明が登場する。

自分の育ち、印象を尊重すること、そして印象は印象にとどまらず人生の光として誕生させること、これは私の信条である。

誕生させるとは組織たてることを意味する。開かれた世界にあって自己の位

置を認知することである。

庄司学誕生の原点の表出を感じる熱い声明である。よく言われる“題目をでっかく”の信条通り、すべてを包容するようなテーマの研究論文が登場するが、それが文字通りとてつもない認識論に結実したのである。そこには仏教思想や柳田の学問が根を張るように横たわっていた。

以上ダイジェストで紹介したが、詳細は尾崎さんがまとめる予定である。乞うご期待。

「人の道一生」の教材化への構想２

篠原賢明

前回の発表を踏まえての続編「人の道一生」のテキストが紹介された。

庄司先生が提案する「人の道一生論」には３つの面がある。一つは非科学的な祝い・式・初めなどの慣習、２つめはそれらを表現するコトワザの側面、さらに心理学や大脳生理学などの科学的な見方である。

篠原さんが作成したテキストは何よりも長野県北部での保護者アンケートデーターが素晴らしく、それをもとにすぐにでも授業に入っていけそうな資料であった。

一方、現代における「人の道一生論」の難しさは、それらの習俗が残っていなかったり形骸化していることにある。妊婦の陣痛とともに近隣の主婦達が「うんうん」といきむ「ソウヘバリ」という島根県の風習などは、共同体の互助的な応援の感覚なのだろうが、近代化され病院で出産することの多くなった昨今では、その意図は授業の中でも伝わりにくいだろう。

ここではさまざまな意見が出たので、いくつかを紹介してまとめとしたい。

山田：教育実験の前にしっかりと地元のアンケートを採ったことが素晴らしい。「引き上げる」という言葉にあの世から引き上げるという深い意味もあるようだ。

石毛：茨城では子どもを産むと言わずに「子を成す」という。子孫を絶つことがないようするという共同体感覚が生み出したものではないか。

長谷川：伝統習俗を大切にする一方で現実には子どもが夫婦の私的な存在となってしまっている。子が生まれると花火を揚げる町があるという行事は、みんなの子どもであるという新しい共同体の試み。「人の道一生」の中にある昔の習俗を今につなげていく視点が必要ではないか。それを踏まえて子供たちに考えさせるということがあってもいいのではないか。

小田：３０年前に太郎次郎社に集まった教員達は、みんなこんな古い非科学的なものを教える必要はないという反応だった。それを突破しようと未来の自分の姿を描かせる実践を行った。韓国の例を挙げれば国際化の中で見つめることもできる。また障害を持っている子達とのつながりも地域共同体で実践しつつあるという現実も盛り込んでもいい。

徳永：柳田の歴史教育が現代からはじまることを踏まえて、現代の貧困や虐待などの問題をとらえて「人の道一生」を展開するという手法がいいのではないか。

尾崎：伊東さんも知らなかったということを踏まえて考えれば、現在との比較という視点が欠かせない。自分の家族はどうなのかという比較の視点は柳田もいくつかの著作で試みている。人間の生き方が代わった場面を捉えることも意識することが大切ではないか。

植垣：ばかばかしいともいえる習俗の本質には、いのちに対する壮大な論理があるような気がする。そこには常民の日々の知恵が詰まっている。こういう壮大さに

近代主義は太刀打ちできないと思う。

庄司：篠原さんのテクストは、よくまとめれています。やっていく中で思いがけない子どもからの反応が出てきたら素晴らしい。テキストの絵には引用ページを書くべき。柳田の教科書のまねごとと思われないためにも。

さきほど伊東さんが「そんなこと知らなかった」といったようにみんな知らないんです。だから先ずこの形で授業をやればいい、現代の問題などはそのあとでいいと思う。

「人の道一生論」の哲学とは何かというとを考えて見て下さい。柳田が６年生の最後にこの教材を出してきたのは、人間というのは盛りの時ばかりではない、ということを子供たちに知らしめたかった。そして人に頼らなければ生きていけないということを教えたいということなんですね。

これでいいの？ 安倍政権の教育「改革」

長谷川孝

相模原を中心に活躍する長谷川さんは、教育の状況は厳しく、現政権がやっているのは教育の戦前化ではないかという。

日教組の共同研究者からの感想を紹介すると「子どもを操作するレポートがとても増えている」ということ。何でも大人が指図する。明治の教育令の復活だと思う。

安倍教育政策の側面がよく出ているのがいじめ対策。いじめは、本来生活行為で日常的な出来事なのにそれを取り締まりをすると子ども達の人間関係がそこなわれてしまうのではないかと危惧する。

子どもを監視したり傍観者という部外者に分類しようとする最近の「いじめの四層構造論」は、子どもが主人公であるということを忘れ、大人が子どもの社会をかき回しているに過ぎないと鋭く指摘する。

ことば遊びドリルに挑戦

伊東　峻

向井さんが長年研究してきたことば遊びの実践をあまり説明しなくてもできるようにと考えたのがドリル化という形。それをもとにした伊東さんのクラスの実践。内容は「あいうえおかきくけこさしすせそ」の十五文字を使ってできる言葉つくり。と「おおやま」から「そつぎょう」で終わるしりとり遊びの紹介。残念ながら生徒の作品が２つしか紹介されていないので全貌が見えてこない。また、植垣さんから「語彙力不足」を補うためにという伊東さんの説明に、ことば遊びの本質はそこではないとの指摘があった。

伊東さんからは４年次研修で「昔から使われている言葉」という単元をやるに当たってどう授業を展開するべきか、という問いかけがあった。ここはしっかりと教科書を使って研究授業をやるべきではないかという意見が大勢を占めた。全面研の教育実験はあくまでも自由な状況の中で展開していくほうがのぞましいだろう。

新参加者紹介

西丸 典秀さん

西丸さんは全面研のホームページを見て今回初めて例会に参加しました。接骨院の勤務経験があり南郷継正理論を学び、今回是非庄司先生にお会いしたいということで参加さました。今後もこの会がお互いの刺激の場になればと思います。

◆１月例会参加者

石毛、伊東、植垣、尾崎、小田、武田、篠

■復刻　庄司和晃著作

『日本人における外来思想の受容的基盤の研究』(1954)より

日本民族の霊魂観念について

―　柳田国男著『先祖の話』を読む　―

一　私と仏教

柳田国男先生の「先祖の話」に最初に目を通したのは今から三年前、昭和二十六年の二月頃である。東京都の世田谷にある成城学園初等科に勤務していた折、社会科のカリキュラム構成のために毎週木曜日の午后、柳田先生を訪ねる機会があった。そこで日本民族の伝承してきた具体的事象について講義を聴き、将来の日本を背負ってたつ小学校の子供等に「これだけは是非教えておきたい」といわれる先生の話を筆記し各単元毎に整理してみた。それに単元設定の理由と目標等を添えて、さらに柳田先生の教えを乞い、こうして世に問うたのが成城学園初等学校編、日本民俗学研究所賛助の「社会科単元とその内容」(昭和二十六年)である。これが二年后，教科書の編纂にまで発展し，実業之日本社から発行される運びとなった。

こうした関係上、柳田先生の著作を手当たり次第蒐集し，一つの驚異と共に深く親しむようになって行った。その最初にこころが牽きつけられ，日本人の微妙な心にタッチする契機となったのが「先祖の話」(昭和二十一年四月発行、筑摩書房)である。

併し，読後感は決して芳しいものではなかった。知識欲を満足させ，心の安定感を保つと云ったようなものでもなかった。それは大きな衝撃であった。一時の傲慢さが完全に崩潰され、思い切り地上に打ちのめされた様な心の動揺があるだけであった。

その衝撃とは何か。

一言もって、これを云えば、それまでの主観的仏教観の完全粉砕による意識化であった。

主観的仏教観という言葉は曖昧だが、仏教というものと意識的に対決して得た確信というものではなく、無意識的に何時の間にか仏教化され、知らず知らずの中にそういうものの考え方をする様になった自己意識というような意味合いである。これは一つの本能的仏教観といってもいいのかもしれない。…

私は曹洞宗僧侶の二男坊として，東北の一寒村に生を享け、幼少より仏販を糧と

し、寺院特有の雰囲気に包まれて成長したということが私をして本能的仏教人と化し、主観的仏教観を懐かしめる結果となった様である。

従って，仏教が悪くいわれたりすると，恰も自分が悪く云われている様なひけめを感じ、本能的に反発するという奇しき現象を生ずるに至った。

【４月例会】
日時：４月１２日（土）１４：００
場所：成城学園大学棟３Ｆ会議室
内容：年報合評会ほか